

《小坡の誕生日》 老舍

(二) 人種問題

小坡にはよくわからなかった。自分は福建人なのか広東人なのか、インド人なのかマレーシア人なのか白人なのか、それとも日本人なのか。だが最近になって、小坡は上に並べた人種のリストから日本を消し去った。なぜかという、最近シンガポールではみんなが「打倒日本」と叫びながら外国製品ボイコットをしているからだ。父さんは（国産品の店を開いているので）、叫ぶのも特に激しく、日本のことが話題にのぼるや怒りだし、首がガマガエルよりも大きくふくらんでしまう。小坡は合点がいかなかった。「どうして日本人はあんなに嫌われていて、恥知らずなんだろう」ある日、小坡は偶然に兄さんの地理の本の中で、日本の地図を見つけた。長い間見ている、彼は少しばかり日本が嫌いになった。日本の国が、首の曲がったオオカミのようにへんてこで、まるで揚げるときに破裂しまった油条<sup>1</sup>（ヨウティヤオ）のような形をしていたからだ。「こんな形をしている油条を油条と言えるのだろうか。一国の形がこんなぱつとしない油条のようだったら、みんなに嫌われたって仕方がないよな。」こうして小坡も日本が嫌いになった。

しかし、自分が何人であるかという疑問がこれで解消されたわけではなかった。

小坡は宝物をひとつ持っていた。誰も（母さんも妹も含めて）、小坡がそれをどこから手に入れたのかは知らなかった。この宝物は、縁が擦り切れて穴があき、色あせてしわくちゃになっている長さ四寸、幅五寸<sup>2</sup>の赤い絹の布だった。この宝物を手に入れて以来、彼は一時たりとも自分のそばから離れたことはなかったのだが、ただ一度だけ、学校に忘れてきたことがあった！ 思い出したとき、彼はもう家に帰っていたのだが、大急ぎで取りに戻った。校門はすでに閉まっていたので、小坡は門番のインド人のおじいさんに、開けてくれるようにと一生懸命

に頼み込んだ。だがインド人のおじいさんは頼みを聞いてくれなかった。それで小坡は校門の前で、用務員や学校内に住んでいる先生たちが、がやがや言いながら出てくるまで声を張り上げて叫び続けた。

先生たちが門を開けてくれると、小坡は矢のように走って教室に入り、石盤の下から宝物を取り出した。小坡は両の目からわっと涙をこぼし、石盤を床に投げつけるとすぐに走り出し、二、三步走ったところで、ついでにインド人のおじいさんを蹴り、宝物を腰に巻き付けて一気に家まで走って帰った。

しばらくたってから、インド人のおじいさんを蹴ってしまったことを後悔していると、妹に言った。夕ご飯のあと、父さんが落花生をみんなに買ってくれた。小坡は、へこんでいるのや小さいのや虫の入っているのを食べずに残しておき、次の日学校に持って行って、インド人のおじいさんにお詫びとして差し出した。おじいさんは、その奇妙な形をした落花生を見ると、受け取りはしなかったが、酢よりもすっぱいみかんを半分小坡にくれた。

この宝物の使い道は実に多かった。上がとがって下が丸くなるように頭に巻きつけ、後ろに一部をたらすと、小坡はすぐにインド人に変身した。たちまち顔が黒くなり、胸に毛が出てきて、話すときは頭をかすかに揺らし、まったくインド人らしい。歩くときは長くなった足を一步一步まっすぐに伸ばしながら、痩せた川鳥のようなかっこうをして歩く。唇は渴いていて、いつもつばを指につけて唇を湿らせる。

この宝物を頭から取って腰にひと巻きするとスカートのようになり、小坡はすぐにマレーシア人に変身する。そして唇を突き出す。床にしゃがんで、手を使って目には見えない想像上のカレー料理を口に運び、食べ終わるとすぐに母さんの口紅をこっそりと使って歯と唇を全部真っ赤に塗り、ビンロウ<sup>3</sup>を噛んだようにする。それからペッペッと床に唾を吐き、吐いたものがあまり赤くなければ、わざわざ口紅を床に塗る！ これで十分唾を吐いたことになり、妹を捜してきて、床の赤く濡れたところを指さして言う。「仙！ ここはマレーシア人の家だよ。さあ。お前は男になって太鼓をたたくんだ。ぼくが踊るから」そこで妹は空になっ

たたばこの缶を持ってきて叩き、小坡ははだしで、腕をさっとかっこうよく伸ばし、腰を左右に軽くひねらせ踊はじめた。踊り終わると、二人は一緒にしゃがんで、また想像上のカレー料理を手で食べるが、今回は干し魚もあり、とても辛くて気分がすかっとする。

小坡は腰に巻いていた宝物をほどき、妹の助けを借りて全力を出して、妹の最も大事な宝物である髪留めを利用して小さなかぶとを作り頭に載せた。それから腰掛けを二つ運んできて、一つの腰掛けの上にあぐらをかいて座り、もう一つの腰掛けにこまごまとした物を並べ、アラブの商人に変身した。「仙、お前は買い物に来たおばあさんになるんだ。いいかい、すぐにお買い物をしなさいよ。いろいろな物はみんな値引き交渉しなさいよ」

そこで仙坡はちょっと腰を曲げ、唇を口の中に引っ込ませ、兄さんのカバンを手提げかごのように持ち、買い物にやってきた。仙坡は腰掛けの上のこまごまとした物を一つ一つ手にとってながめ、ある物は値踏みをするかのように上下に少し揺らし、ある物は鼻にもって行って匂いをかぎ、最後までどれを買うとは言わない。小坡は片方の手をひざの上に置き、もう片方の手はかかとを抱えて天井を見ながら平気そうなそぶりをしている。仙坡が何も言わずに向きを変えて行こうとすると、小坡は手を上げ、親指と人差し指を仏様のように丸めて、仙坡のえりくびをつまんで引き戻す。仙坡はまた品物をすべて触り、それから蓋付きの鉄の箱を手にとり、値踏みをするように手のひらに載せて動かした。小坡が値段を告げる。仙坡は箱を置いて行こうとする。小坡は腰掛けの上から飛び降りてきて、肩をいからせながら、仏様の指のようにした手を空中で回しながら、彼女に値引き交渉をするように迫った。仙坡は頭を振るだけだった。小坡はしきりに肩をあげ、箱を布でちょっと擦った。それから窓ぎわの明るいところに走っていき、箱を高く上げて、仔細に鑑賞し、「決して手放さないぞ」というような様子を見せた。仙坡がついてきて、ためらいながら値引き交渉をした。小坡の目はまるで重要なしごとができたかのように、箱をわきにはさみ、いくら高くても売らないという表情を見せた。仙坡がまた腰を曲げて歩いていこうとすると、小坡は呼び戻

して値引き交渉をさせる……。仙坡は腰が痛くなったので腰を伸ばすしかなく、小坡もずっと話し続けて口が渴いてしまい、ここにおいてこのアラブ人ごっこは終わりを告げたのである。

どうなのが広東人なのか、どうなのが福建人、上海人なのかに至っては、小坡は十分な知識がなかった。しかし、彼はいい解決方法を見いだした。父さんは広東人だとみんなが言っているのだから、当然広東人は父さんとほとんど変わらないだろう。福建人については、小坡がもっともよく知っているのは、父さんの国産品商店のとなりの信和外国製品商店の林老板<sup>4</sup>（ラオパン）だった。林老板に対する父さんの感情は悪いもので、それは日本人を敵視しているのとほとんど同じほど強かった。林老板の話がでるといつも、「あいつら福建人には愛国心がない」と言った。小坡の見たところでは、林老板は愛すべき太っちょのおじさんであるだけでなく、彼の店の外国製品は父さんが扱っている品物よりもずっときれいがかっこよかった。西洋人形についていえば、彼だけでなく、妹も、もし自分が結婚するときが来たら、必ず林老板のところで目がぱちぱち動く西洋人形を買ってお嫁入りするだろう、と強く言った。

幸いにも、外国製品を売っていることと林老板がほんとに悪い人かどうかという問題を小坡は深くは追求せず、ただ林老板のように完璧な福建人に扮することに決めていた。まず、林老板の口には一個の金歯がある。父さんや父さんの友達のように口全体が金色に光ってはいない。小坡は当然のことながら、歯が取り付けられるものだとはいえず、福建人は生まれつき広東人よりも金歯が少ないのだとずっと思っていた。二番目に、林老板の服装や態度はとても上品で可愛らしかった。父親と違って、口にはいつもルソン産の長くて大きな葉巻をくわえ、話し方も父親のようではなく、堂々と胸を張って大きな声を出して品物を売っていた。彼は一度、林老板は夏物の上着を着ているのを見た。これは彼がひとえの中国服がなんと膝を越えることができるのを見た初めてのことであった。彼は福建人に扮するときにはいつも、あの赤い絹の宝物を背中に羽織って長い上着のようにして、それから黄色の紙を糸切り歯に貼り付けて、林老板のたった一つの金歯のように

仕立てた。

母さんは言った。「広東語、福建語が話せなくてきちんと洋服を着ているのはだいたい上海人なんだよ」そこで小坡は上海人になるときは、いい服を着る必要があった。さらに妹と一緒に上海語に似せた新しい言語を作らなければならなかった。この種の言葉を、彼らは勝手に作ってはすぐに忘れた。しかし、永遠に変わらないものも幾つかあった。たとえば「たばこ」を「犬の耳」と言ったり、「バナナ」を「ネズミ」と言ったりなどした。

西洋人の鬼子<sup>5</sup> (ウイズ) はすぐに見分けがついた。彼らの顔色、鼻、髪、目、すべてははっきりとした特徴があった。しかし、彼らのことばは上海人のことば同様、理解できなかった。あるいは、彼らはみんな上海から来たのかもしれない。兄さんはいま鬼子のことばを学んでいた。新しく学校にきた上海人の先生が国語を教えていたのだが、兄さんが勉強した鬼子のことばは上海人の国語とほとんど同じとは思えず、この事がまたいかにもわけがわからないことだった。シンガポールにいる人間はみな裸足でいるのが好きだったが、西洋人たちだけは靴下をはいていたし、彼らが木のサンダルをつっかけ街を歩いているのを見たことはなかった。それで西洋人に扮するとき、靴下をはき革靴をはかないわけにはいかなかった。妹は靴下をはくのはまったく反対だった。靴下を穿いていない西洋人はほとんど見かけなかったが、軍服を着ている西洋人は多かった。それで小坡は、少なくとも軍人の皮ベルトには見えるだろうと思って、例の宝物を一寸ほどの幅に折り畳んで腰に巻いて締めた。これで容易に鼻が高くなったりするだろう。皮のベルトを締め、西洋人になったと思うや、鼻はすぐに高くなり、目玉は青くなった。ときどき仙坡が、彼の鼻は低いままで、目もぜんぜん青くないと言っても、それはただ仙坡が、たまたま性格が素直じゃなくてわざとそう言っているだけで、小坡がまったく西洋人のようではない、というわけではないのだ。小坡にはこれらの人々に関して、このようにほぼ区別ができていたところとそれほどはっきり

区別できていないところがあったのではあるが、このことで、自分がどの人種に属しているかを彼が正確に知っていた、と言うことはできない。小坡は、これらの人々はみんな同じ一族の人間だと思っていたのだ。黄色い顔の人は大きくなって黄色い顔になるし、黒い色が好きな人は黒い顔と、人々の顔つきや体つきはもともと自由に変化する。そうでなければ、小坡が赤い布を巻いたとき、どうして顔が黒くなったり鼻が少し高くなったように感じるものか。その上、街で見かける子供たちは、黒と黄色と同じではないが、みんなマレーシア語を話すではないか。(彼と妹もいつもマレー語で話していた。) これはもともとみんなマレーシア人で、あとになって顔色が少しずつ変わっていった証拠ではないのか？ また、校門を入るとすぐに赤色のシンガポール地図が見える。シンガポールは丸いか、というところではないし、四角いか、というところでもなく、ちょうど母さんが不機嫌なときにつくる涼糕<sup>6</sup>(リャンガオ)のようなかたちをしている。この涼糕の上には中国やインドの地名はない。母さんと父さんは中国から来た。店の門番はインドから来たというのは、まったくでたらめな話じゃないのだろうか。母さんはでたらめをよく言う。四つ耳のお化けとか中国に土地神さまがいるとか、みんなでたらめだ。当然ながらこの種のでたらめな話は聞いておもしろいではあるが。兄さんはまったく人受けがよくない。小坡が福建人、マレーシア人、インド人の子供たちと遊んで居るのを見ると、すぐに父さんに言いつけにいき、父さんに「小坡は見込みがない」と言わせてしまう。小坡は厳粛な態度で兄さんに向かって言明した。「ぼくたちが一緒に遊んでいるとき、ぼくはみんなを中国人に変身させるよ。それでもだめなの？」すると兄さんはまったく認めず、やはり父さんに知らせにいくのだ。父さんは何の理由もなく、広東人以外のすべての人間が嫌いだった。さらに小坡に理解できなかったのは、母さんも父さんからこの欠点を学んだということだ。 あるとき、彼は母さんに尋ねた。「父さんは小さいとき、マ

レーシア人じゃなかったの？」母さんは長いあいだ無視して答えてくれなかった。だが、やっぱり妹は良い。彼女はこう言った。「東街の子供たちはみんなお父さんがマレーシア人よ。私たちのお父さんも絶対にマレーシア人よ」「そうだ！ マレーシア人は上海から来たんだ。父さんは上海人をバカにしているからマレーシア人が嫌いなんだ。でもどうして父さんは上海人をバカにしているんだろう」小坡は首をかしげながら言った。「お父さんは広東から来たのよ。お母さんが言ってたよ、広東人はこの世でいちばん良くていちばんお金持ちだって！」

仙坡がこう言っているときの顔つきは、小坡の妹ではなくて、まるでお姉さんのようだった。「広東はつまりインドなんだ」仙坡はしばらく考えて言った。「そうよ！」「ねえ、お前が大きくなって、子供がほしいという時がきたら、どこに行って拾ってくるかい？」「私？」仙坡はおさげの先の赤いリボンを触りながらしばらく考えて言った。「私、西のほうのインド人の家に行って一人持ってくる」「そうだよ！ インド人の赤ちゃんの小さな黒い鼻、大きな目、赤いくちびる、すごく可愛いよね」「そうよ」「でも母さんは好きじゃないかもしれないよ」「私、母さんに言う。どうせインド人の赤ちゃんも大きくなったら中国人に変わるんだ。ほら、ぼくたちの飼ってるあの小さな黄色いヒヨコだって、みんなだんだん黒い毛とか赤い毛のニワトリに変わるじゃない。赤ちゃんだってあんなふうに変化するのよ」「そのとおりだ！！」彼らはこうやって人種問題を解決したのだった。

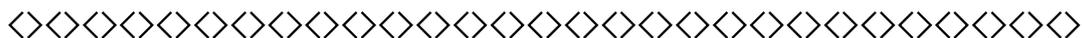
- 1 油条……小麦粉を練って棒状にし油で揚げた揚げパン。
- 2 寸……長さの単位。約3.3センチ
- 3 ビンロウ……ビンロウ樹の種子と石灰をキンマ（コショウ科の植物）の葉で包んだ嗜好品の一種。嚙むと唾液が赤くなり、これを飲み込むと胃を痛めるので吐

き出す。

4 老板……個人經營の商工業の経営者や店主を指す。

5 鬼子……外国人に対する蔑称。

6 凉糕……モチ米粉で作られる団子のような食べ物。



(中国語原文)

## (二) 种族问题

老舍

小坡弄不清楚：他到底是福建人，是广东人，是印度人，是马来人，是白种人，还是日本人。在最近，他从上列的人种表中把日本人勾抹了去，因为近来新加坡人人喊着打倒日本，抵制仇货；父亲——因为开着国货店——喊得特别厉害，一提起日本来，他的脖子便气得比蛤蟆的还粗。小坡心中纳闷：为什么日本人这样讨人嫌，不要鼻子。有一天偶然在哥哥的地理书中发现了一张日本图，看了半天，他开始也有点不喜欢日本，因为日本国形，不三不四恰像个“歪脖横狼”的破炸草油条。油条炸成这个模样，还成其为油条？一国的形势居然像这样不起眼的油条，其惹人们讨厌是毫不足怪的。于是小坡也恨上了日本！

可是这并不先减少他到底是哪国人的疑惑。

他有一件宝贝，没有人知道——连母亲和妹妹也算在内——他从哪儿得来的：这件宝贝是一条四尺来长，五寸见宽的破边、多孔、褪色、抽抽疤疤的红绸子。这件宝贝自从落在他的手里，没有一分钟离开过他。就是有一回，把它忘在学校里了！他已经回了家，又赶紧马不停蹄地跑回去。学校已经关上了大门，他央告看门的印度把门开开。印度不肯那么办，小坡就坐在门口扯着脖子喊，一直地把庶务员和住校的先生引全嚷出来。

先生们把门开开，他便箭头儿似的跑进讲堂，从石板底下掏出他的宝贝。

匆忙着落了两点泪，把石板也摔在地上，然后三步两步跑出来，就手儿

踢了老印度一脚，一气跑回家，把宝贝围在腰间，过了一会儿，他告诉妹妹，他很后悔踢了老印度一脚。晚饭后父亲给他们买了些落花生，小坡把瘪的、小的、有虫儿的都留起来，第二天拿到学校给老印度，作为赔罪道歉；老印度看了看那些奇形怪状的花生，不但没叹，反给了小坡半个比醋还酸的绿橘子。

这件宝贝的用处可大多多了：往头上一裹，裹成上尖下圆，脑后还搭拉着一快儿，他便是印度了。登时脸上也黑了許多，胸口上也长出一片毛儿，说话的时候，头儿微微地摇摆，真有印度人的妖劲儿。走路的时候，腿也长出一块来，一挺一挺的像个细瘦的黑鸬鹚；嘴唇儿也发干，时常用手指沾水去湿润一回。

把这件宝贝从头上撤下来，往腰中一围，当做裙子，小坡便是马来人啦。嘴唇撅撅着。蹲在地上，用手抓着理想中的咖喱饭往嘴中送，一吃完饭，把母亲的胭脂偷来一小块，把牙和嘴唇全抹红子，作为是吃槟榔的结果；还一劲儿呸呸地往地上唾，唾出来的要是不十分红，就特别他用胭脂在地上抹一抹！唾好了，把妹妹找了来，指着地上的红液说：

“仙！这是马来人家。来。你当男人，你打鼓，我跳舞。”

于是妹妹把空香烟筒儿拿来敲着，小坡光着胖脚，胳膊“软中硬”地伸着，腰儿左右轻扭，跳起活儿来。跳完了，两个蹲在一处，又抓食一回理想的咖喱饭，这回还有两条理想的小干鱼，吃得非常辛辣而痛快。

小坡把宝贝从腰中解下来，请妹妹帮着，费五牛二虎的力气，把妹妹的几个最宝贵的破针全利用上，做成一个小红圆盔，戴在头上。然后搬来两张小凳，小坡盘腿坐上一张，那一张摆上些零七八碎的，作为是阿拉伯的买卖人。

“仙，你当买东西的老太婆。记住了，别一买就买成，样样东西都是打价钱的。”

于是仙坡弯着点儿腰，嘴唇往里瘪着些，提着哥哥的书当篮子，来买东西。她把小凳上的零碎儿一样一样地拿起来瞧，有的在手中颠颠搁一颠，有的搁在鼻子上闻一闻，始终不说买哪一件。小坡一手摺在膝上，一手搬着脚后跟，

眼看着天花板，好似满不在乎。仙坡一声不出地扭头走开，小坡把手抬起来，手指捏成佛手的样儿，叫仙坡回来。她又把东西全摸子一个边儿，……然后拿起一支破铁盒，在手心里颠弄看。小坡说了价钱。仙坡放下铁盒就走。小坡由凳上跳下来，端看肩膀，指如佛手在空中摇画，逼她还个价钱。仙坡只是摇头。小坡不住地端肩膀儿。他拿起铁盒用布擦了擦，然后跑到窗前光明的地方，把铁盒高举，细细地赏玩，似乎决不愿意割舍的样子。仙被跟过来，很迟疑地还了价钱，小坡的眼珠似乎要努出来，把铁盒藏在腋下，表示给多少钱也不卖的神气。仙坡又弯着腰要走了，他又喊着让价儿。……仙坡的腰酸了，只好挺起来，小坡的嘴也说干了，直起白沫：于是这出阿拉伯的扮演无结果地告一结束。

至于什么样儿的是广东人，和什么样儿的是福建人、上海人，小坡是没有充分的知识的。可是他有很好的解决办法：人家都说，父亲是广东人，那么，自然广东人都应和父亲差不多了。至于福建人呢，小坡最熟识的是父亲的国货店隔壁信和洋货庄的林老板。父亲对林老板感情的怀恶，差不多等于他恨日本人，每谈到林老板的时候，父亲总是咬着牙说：“他们福建人！不懂得爱国。”据小坡看呢，不但林老板是胖胖大大的可爱，就是他铺中的洋货也比父亲的货物漂亮花俏得多。就拿洋娃娃说，不但他自己，连妹妹也是这样主张：假如她出嫁的时候，一定到林老板那里买两个眼珠会转的洋娃娃，带到婆家去。

好在卖洋货和林老板是否可恶的问题，小坡也不探究，他只认定了穿着打扮像林老板的全是福建人。第一，林老板嘴中只有一个金牙，不像父亲和父亲的朋友们都是满嘴黄澄澄的。小坡自然不知道牙是可以安上去的，他总以为福建人是生下来就比广东人少着几个金牙的。第二，林老板的服装态度都非常文雅可爱，嘴里也不像父亲老叼着挺长挺粗的吕来烟，说话也不像父亲那样理直壮地卖嚷嚷。他有一回还看见林老板穿起夏布大衫，这是他第一次看到褂子居然可以长过膝的。每逢他装福建人的时候，他便把那块红绸宝贝直披在背后当做长袍，然后找一点黄纸贴在犬牙上，当做林老板的唯一的

金牙。

母亲说：“凡是不会说广东、福建话，而规规矩矩穿着洋服的都是上海人。”于是小坡装上海人的时候，必要穿好了衣裳。还要和妹妹临时造一种新言语代表上海话，这种话他们随时造随时忘，可是也有几个字是永远不变动的，如管“香烟”叫“狗耳朵”，把“香蕉”叫“老鼠”等等。

外国洋鬼子是容易看出来的，他们的脸色、鼻子、头发、眼珠，都有显然的特色。可是他们的言语和上海人的一样不好懂，或者洋鬼子全是由上海来的？哥哥现在学鬼子话了；学校新来的一位上海先生教他们国语，而哥哥学的鬼子话又似乎和上海人的国语不是一个味儿，这个事儿又透着有点糊涂！在新加坡的人们都喜光着脚，唯独洋鬼子们总是穿着袜子，而且没看见过他们趿拉着木板鞋满街走的。所以装洋鬼子的时候，一定非穿袜子皮鞋不可。妹妹根本反对穿袜子，也只好将就着不叫她穿。不穿袜子的鬼子很少见，可是穿军衣的鬼子很多，于是小坡把那件宝贝折成一寸来宽，系在腰间，至少也可以当一条军人的皮带。至于鼻子要高出一块等等是很容易的。一系上皮带，心里一想，鼻子就高了，眼珠便变成蓝色。虽然有时候妹妹说：他的鼻子还是很平，眼珠一点也不蓝。那只是妹妹偶然脾气不顺，成心这么说，并非是小坡不真像洋鬼子。

小坡对于这些人们，虽然有这样似乎清楚，面又不十分清楚的分别，可是这并不是说他准知道他是哪一种人。他以为这些人都是是一家子的，不过是有的是爱黄颜色便长成一张黄脸，有的喜欢黑色便来一张黑脸玩一玩。人们的面貌身体本来是可以随便变化的。不然，小坡把红巾往头上一缠的时节，怎么就能脸上发黑，鼻子觉得高出一块呢？况且在街上遇见的小孩子们，虽然黑黄不同，可是都说马来话，（他和妹妹也总是用马来话文谈的。）这不是本来大家全是马来，而后来把颜色稍稍变了一变的证明马？况且一进校门便看见那张红色的新加坡地图。新加坡原来是一块圆不圆，方又不方，像母亲不高兴时做饭的凉分糕；这块凉糕上并没有中国、印度等地名；那么，母亲一来就说：她与父亲都是由中国来的，国货店看门的是由印度来的，岂不是根本

瞎说？新加坡地图上分明没有中国印度啊！母亲爱瞎说，什么四只耳朵的大老妖咧，什么中国有土地爷咧，都是瞎说，自然哪，这种瞎说是很好听的。

哥哥是最不得人心的：一看见小坡和福建、马来、印度的小孩儿们玩耍，便去报告父亲，惹得父亲说小坡没出息。小坡郑重地向哥哥声明：“我们一块儿玩的时候，我叫他们全变成中国人，还不行吗？”而哥哥一点也不原谅，仍然是去告诉父亲。

父亲的没理由，讨厌一切“非广东人”。更是小坡所不能了解的，就是妈妈也也跟着父亲学这个坏毛病：有一回他问母亲，父亲小的时候是不是马来人？母亲居然半天儿没有答理他！还是妹妹好，她说：“东街上的小孩儿们全有马来父亲，咱们的父亲也一定是马来。”

“一定！马来人是由上海来的，父亲看不起上海人，所以也讨厌马来。不知道父亲为什么看不起上海人？”小坡摇着头说。

“父亲是由广东来的，妈妈告诉我的，广东人是天下最好最有钱的！”仙坡这时候的神气颇似小坡的老大姐。

“广东就是印度！”

仙坡想了半天：“对了！”

“仙！赶明儿你长大了，要小孩的时候，你上哪里去捡一介呢？”

“我？”仙坡揉着辫子上的红穗儿，想了半天：“我到西边印度人家去抱一个来。”

“对了，仙！你看印度小孩儿的小黑鼻子，大白眼珠，红嘴唇儿，多么可爱呀！是不是？”

“对呀！”

“可是，妈妈要不愿意呢？”

“我告诉妈妈呀，反正印度小孩儿长大了也会变成中国人的。你看，咱们自那几小黄雏鸟，不是都慢慢变成黑毛儿的，和红毛儿的了吗？小孩也能这样变颜色的。”

“对了！仙！”

他到这样解决了人种问题。

(『中国名家经典童话—老舍选集』 同心出版社, 北京, 2009, pp. 35—41, .)

